熊取町埋蔵文化財調査報告第21集

中家住宅発掘調査概要 I

—中家住宅93-1区の調査—

１９９４年　３月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町内では、現在のところ38カ所の埋蔵文化財の包蔵地（遺跡）が確認されております。この埋蔵文化財は、はるか昔にわたしたち熊取の地に根をおろした人々が長きにわたり築き上げてきた文化を知ることのできる貴重な文化財の一つであります。

今回報告する中家住宅とは、熊取町大字五門にあります重要文化財中家住宅とその周囲一帯の遺跡でありますが、この場所は江戸時代に七人庄屋の筆頭であった中家があることからわかりますように、熊取町の中心になった場所であります。今後発掘調査が進むにつれ、徐々に熊取町の歴史が解明されていくでしょうが、その中にあってこの中家を中心とした地域の発掘調査は重要であると思われます。

今年待望の関西国際空港が開港される等、泉州地域は急速に変化しつつあります。熊取町におきましても様々な土地開発が行われ、数多くの遺跡が破壊の危機に直面しております。このような社会状況の中で、教育委員会ではわたしたちの文化遺産である遺跡の記録・保存を行うために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査等を実施してまいりました。

本書は、平成５年度に熊取町教育委員会が委託を受けて実施した中家住宅93－１区の発掘調査の成果を概要報告書としてまとめたもので、泉州地域の歴史解明のための資料となり、文化財保護活動の一端を担うことができればと念願し発刊するものであります。

最後になりましたが、発掘調査とその整理作業にあたって多大なるご協力とご理解を頂きました土地所有者ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、文化財保護に対するより一層のご協力・ご理解をお願いする次第であります。

平成６年　３月

熊取町教育委員会

教育長　七　里　　弘

例　　言

1．本書は、熊取町教育委員会が受託事業として平成５年度に実施した、中家住宅93－１区の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び整理作業に要した費用は、本事業の委託者である大南　清志氏の全額負担によるものである。

3．調査は熊取町教育委員会町史編さん室 前川　淳を担当者として行われた。

4．本書における標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外について磁北を示すこととした。

5．土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第10版（農林水産省農林技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修　1990年度版）を援用した。

6．調査の実施にあたり、土地所有者である大南清志氏をはじめ、大南工務店の方々から協力・援助を得た。また、本書の執筆に際して、内本勝彦氏・近藤康司氏・嶋谷和彦氏・土山健史氏・増田達彦氏（以上堺市立埋蔵文化センター職員）から有益な御教示を賜った。記して感謝を表します。

7．本書の執筆・編集は前川　淳が行った。

目　　次

はしがき

例　　言

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的・歴史的環境 …… 1

第２節　中家住宅について …… 2

第２章　調査の概要

第１節　調査の契機 …… 3

第２節　基本層序 …… 4

第３節　遺構 …… 7

第４節　遺物 …… 11

第３章　おわりに …… 15

挿　図　目　次

第１図　熊取町の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 2
第３図　調査地点位置図 …… 3
第４図　調査区位置図 …… 4
第５図　調査区平面図・壁面土層図 …… 5
第６図　ＳＤＩ断面図 …… 7
第７図　ＳＰＩ断面図 …… 8
第８図　ＳＵＩ平面図・断面図 …… 8
第９図　ＳＫＩ断面図 …… 10
第10図　ＳＫ２断面図 …… 11
第11図　ＳＫ３断面図 …… 11
第12図　出土遺物 …… 14

図　版　目　次

図版第１　調査区全景
図版第２　土層
図版第３　遺構
図版第４　出土遺物
図版第５　出土遺物
図版第６　出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的・歴史的環境

熊取町では縄文時代から既になんらかの文化的な営みが行われていたということが発掘調査によって明らかにされている。東円寺跡は現在の熊取町役場付近を中心に広がり、町内の遺跡では最大級の規模となった複合遺跡であるが、平成５年度の調査において、縄文時代早期の有舌尖頭器が出土した。また熊取駅の東側に位置する大久保Ｅ遺跡では庄内式併行期に比定される夥しい数の土器が出土するなど、他にも弥生～古墳時代における文化の営みを刻んだ形跡も少なくない。

第１図　熊取町の位置

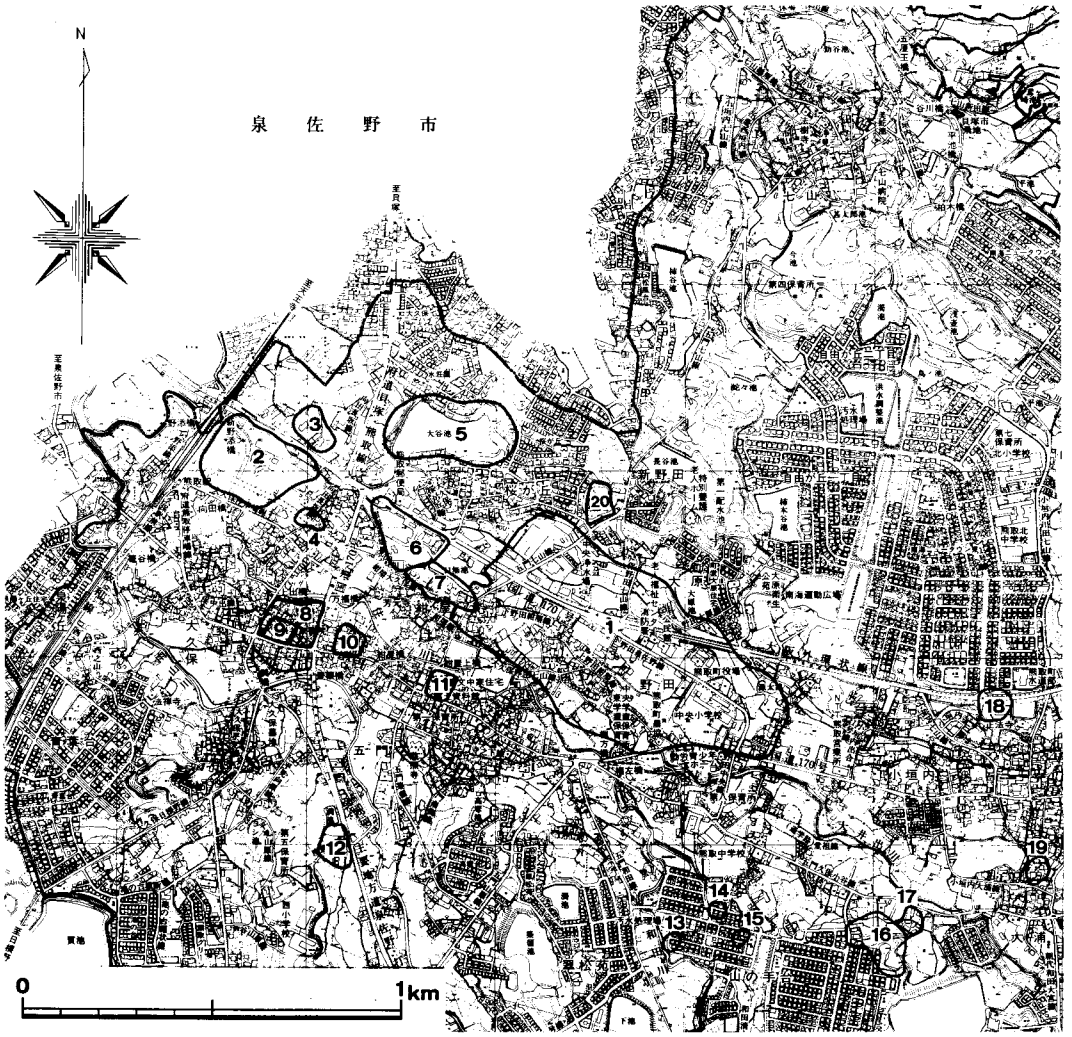
今回の調査地点は熊取町の北西部、熊取町大字五門にある重要文化財の中家住宅の東方約50mに位置し、国道170号に沿う。中家住宅遺跡包蔵地は大井出川から続く住吉川中流左岸に位置している。付近一帯には古くからの商店や多くの家屋が軒を並べ、熊取町の中でも歴史的な趣を感じさせる街路をみせている。

文献等にあるように、中家住宅を中心とする五門の付近一帯が繁栄をみせるのは、おそらく15世紀以降であったと思われる。そこで重要になると思われるのは、住吉川を挟んで向い合う丘陵地上において平安末期頃に建立されたと思われる「東円寺」である。出土した瓦から平安末期頃には寺院が存在していたことが推定されており、その周辺地域では古代以前の遺構や13世紀頃までの掘立柱建物跡等多数の遺構が発見され、中家住宅のある五門付近との関連が注目される。また五門南部の微高地には、五門古墳・五門北古墳が存在したといわれている。現在その痕跡すら辿れない状況にまで地形は一変したが、調査地点を含む地域では古代以前よりなんらかの文化が営まれていたのに相違ない。

今回の調査地点は小字名を「元屋敷」といい、ここが元々中家の屋敷地だった可能性を示している。残念ながら江戸時代の古図ではこの地点を確認することはできない。

いわば今回の調査が五門一帯における調査の端緒である。この付近がいつどのようにして開かれていったのかを究明し、中家住宅の領域や建物等の平面構成の研究をすすめ

ていきたいと思う。



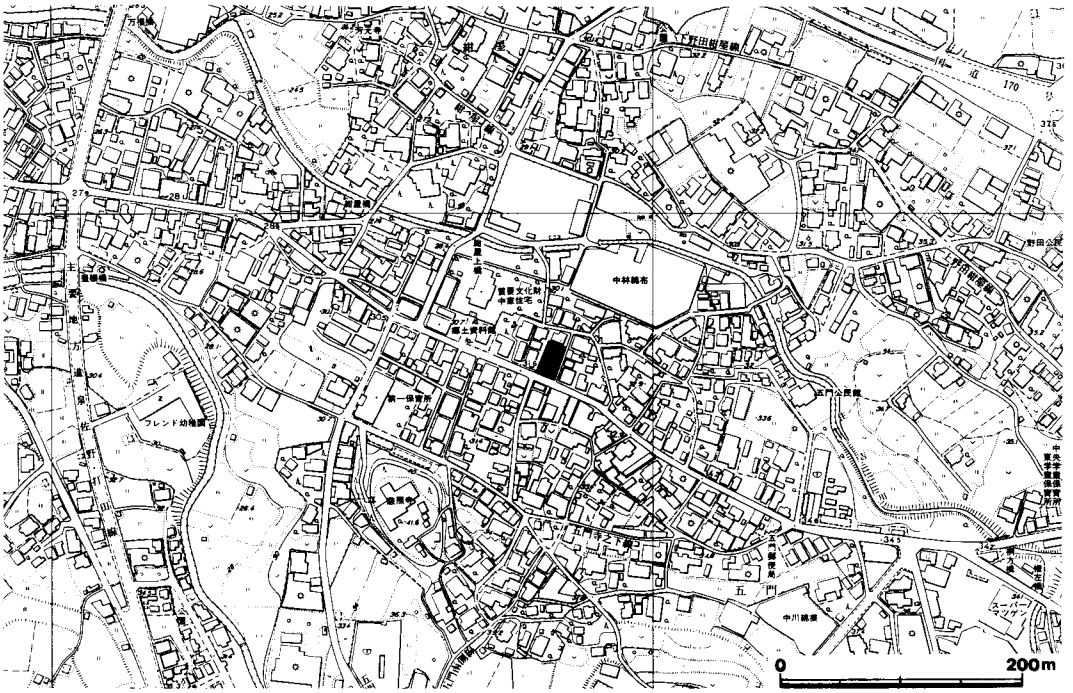
1．東円寺跡	2．大久保Ｂ遺跡	3．大久保Ｄ遺跡	4．大久保Ｅ遺跡
5．大谷池遺跡	6．紺屋遺跡	7．口無池遺跡	8．降井家屋敷跡
9．降井家書院	10．大久保Ｃ遺跡	**11．中家住宅**	12．大久保Ａ遺跡
13．五門遺跡	14．五門北古墳	15．五門古墳	16．大浦中世墓地
17．大浦遺跡	18．小垣内遺跡	19．甲田家住宅	20．祭礼御旅所跡

第２図　周辺の遺跡

第２節　中家住宅について

昭和39年に重要文化財に指定された中家住宅（主屋１棟　附表門、唐門各１棟）は、泉南地方の旧家である中家の居宅であった。主屋と唐門は17世紀の建築といわれ、表門も18世紀頃のものと推定されている。昭和43年には保存のための大幅な解体修理を終え

たが、その際主屋の基礎部分にも若干の調査が行われ、その礎石に関しては全く変動の形跡がないことがわかっている。残念ながら17世紀以前の建造物の存在についてはなにも確かめられていないが、屋敷古図からは中世土豪の居館のたたずまいを偲ぶことができる。



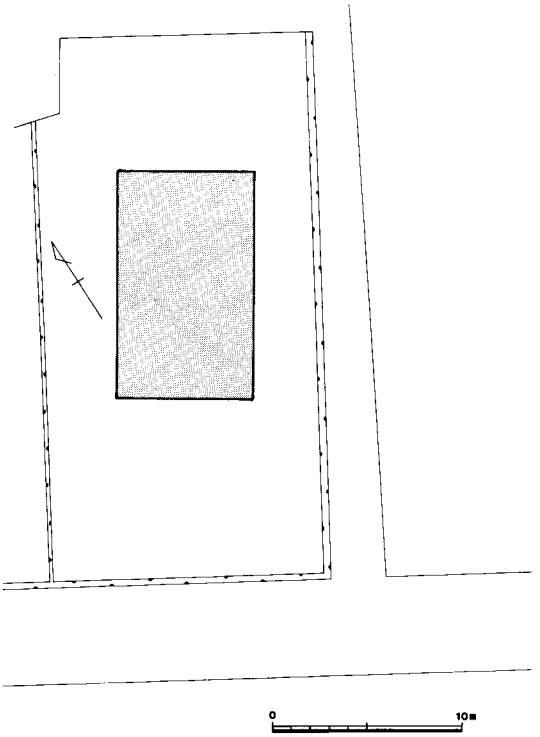
第３図　調査地点位置図

第２章　調査の概要

第１節　調査の契機

熊取町大字五門42-2，42-3番地において、当地の所有者である大南清志氏から集合住宅の新築工事の計画が上がった。当地点が中家住宅として周知される範囲内にあることから、熊取町教育委員会ではまず平成５年９月６日よりトレンチ調査を行った結果、地表面下－30cm前後に遺構状の落込みと若干の遺物が検出された。この結果をもとに当事者と協議を行い、熊取町教育委員会町史編さん室が継続調査することとなった。

申請面積396.82㎡に対して、建物の基礎工事が行われる部分を調査区に設定したが、国道170号に面する南側部分はトレンチ調査の際、地山深くまで達する程の撹乱をうけていることが確認されていたため、調査区については中央部分の約84㎡（12×７ｍ）とし



第４図　調査区位置図

た。現地調査は平成５年９月６日から10月２日まで行った。

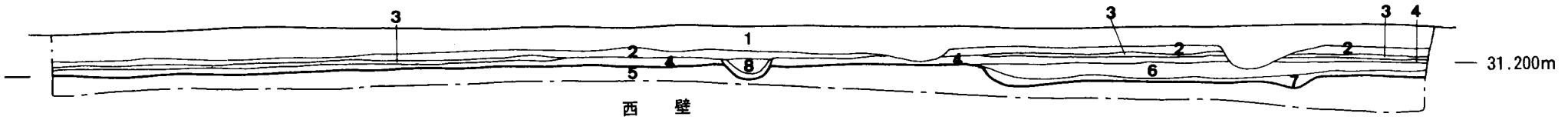
調査は、現地表面より－20cm付近まではあるとおもわれる近代の撹乱層を機械掘削によって除去した後、黄褐色粘質土の地山面上面を遺構面として人力掘削によって検出することとした。実測および写真撮影は遺構面の残存状況から、最終段階に行った。

整理調査に関しては、平成５年10月26日から始め、本書の作成をもって終了した。

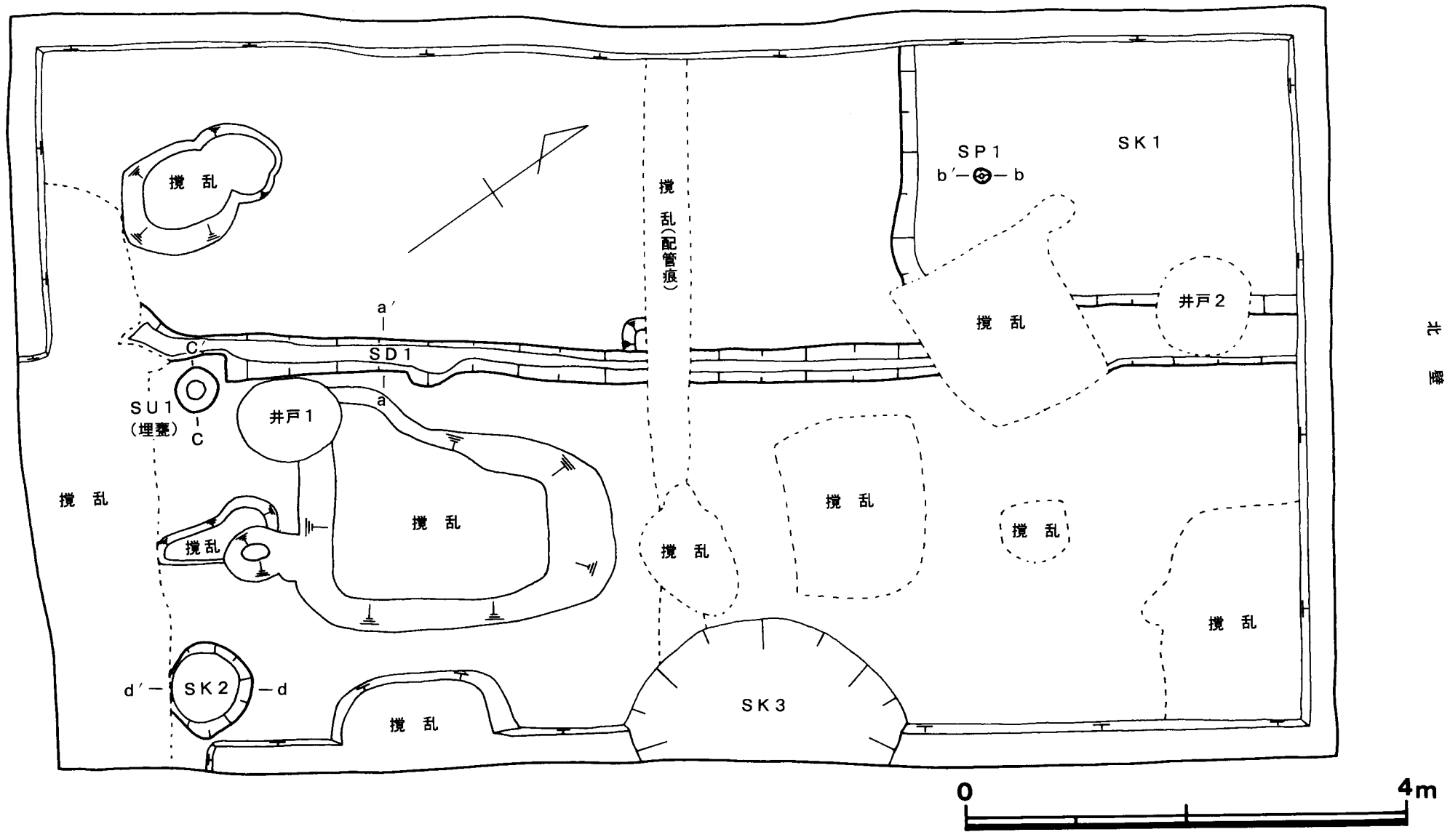
第２節　基本層序（第５図）

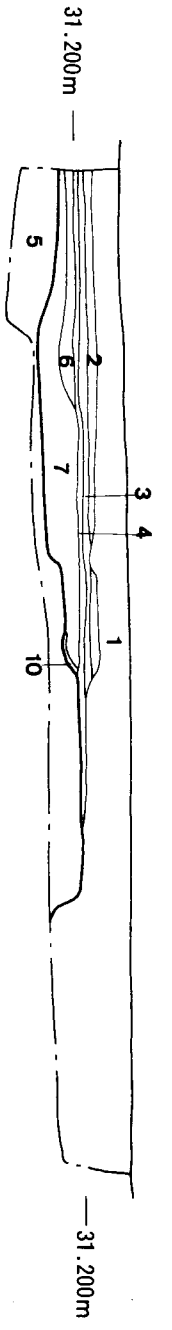
今回の調査区内の層序を考える際まず念頭に置きたいのは、現在の地表面から僅か30cm程度の位置（標高はＴ．Ｐ＝31.500m）に残在していた黄褐色粘質土⑤であり、地山と考えられることである。そしてその黄褐色粘質土上面は、調査区の多くの部分では近代の撹乱によって、本来あったと思われる中近世の層とともに失われていることである。従って後に述べる各時代の遺構については、あたかも同時代のものであるように、その黄褐色粘質土⑤（地山）上に均一になって検出される結果となったことである。以下調査によって得られた土層図を中心に観察し、検討を加えた。

上から順に観察すると、極めて新しい時期の整地撹乱層①が、近代の耕作土②を削平しており、この耕作土はその下の褐色の床土③とともに調査区西壁土層断面の中央付近にみえる近代の配管工事の痕跡埋土⑧⑨を切っている。また配管工事以前のものとみられる土層は調査区北壁および西壁に比較的厚くみられる茶褐色砂質土層④である。この茶褐色砂質土は、調査区の北西側で土壙ＳＫ１埋土⑥の上面を中心にして、一部黄褐色粘質土⑤の上部にも堆積しているようである。この層は一見黒味を帯び一種の泥土的性格が考えられ、特に調査区の北西部分にみられる。後述する土壙ＳＫ１は本来の機能を失って廃棄物の捨て場となり、埋土⑥をともなって標高32.200m付近に埋没した後、周囲よりも一段低かったため、溜水等があったものかと思われる。また調査区の南側の土



1. 撹乱				6. 2.5Y	7/4	浅黄色	砂質土（ＳＫ１埋土）
2. 5Y	6/3	オリーブ黄色	砂質土（旧耕作土）	7. 2.5Y	5/1	黄灰色	砂質土（ＳＫ１埋土）
3. 10ＹＲ	6/4	にぶい黄色	砂質土（旧床土）	8. 2.5Y	7/3	浅黄色	粘質土（配管痕）
4. 2.5Y	6/1	黄灰色	砂質土	9. 2.5Y	6/2	灰黄色	砂質土
5. 5Y	8/6	黄色	粘質土（地山）	10. 10ＹＲ	5/1	褐灰色	砂質土（ＳＤ１埋土）





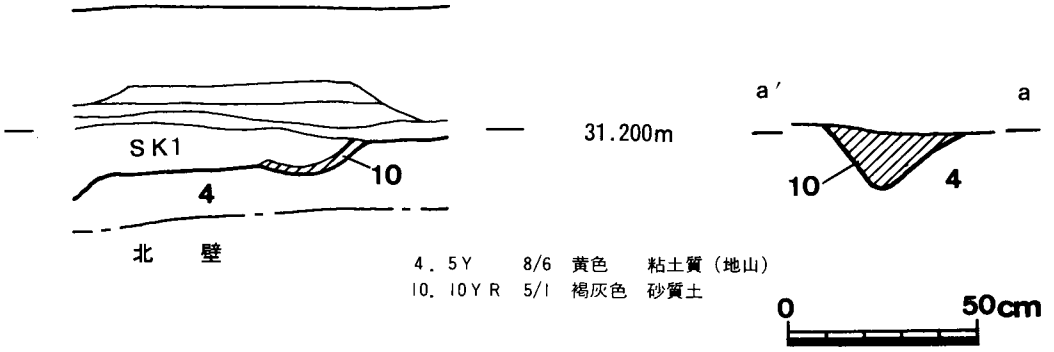
第５図　調査区平面図・壁面土層図

層にこの茶褐色の砂質土④がみられないのは、南側はその時点では削平等をうけず、標高が比較的高かったためではないかと思われる。

地山とした黄褐色粘土層⑤がいつ頃形成されたものなのかを推定する手掛かりは得られなかったが、それ以外に15世紀より前を示す土層は認められなかった。

第３節　遺構（図版３）

溝ＳＤ１



第６図　ＳＤ１　断面図

検出状況では幅約30cm前後、深さ約20cm、長さ約20ｍで調査区の南北両端を結ぶような細長い断面Ｖ字状の溝である。方向は南北から約30度東に向いており、現在の街路や西方約50ｍにある中家住宅の主屋に対してほぼ平行・垂直の関係にある。

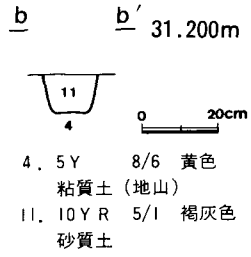
先に触れたように、この遺構も後世の削平をうけている。北壁土層の観察のとおり、この溝の上部は、この西側に存在するＳＫ１の埋土⑥⑦によって切られる状況が認められる。ＳＫ１はその埋土内の遺物から16世紀後半～18世紀前半に掘削された遺構と思われるため、このＳＤＩとは区別されるものである。従って溝ＳＤＩの上部は失われており、本来はもう少し広く深いものだったと思われる。

埋土は一層で明灰色砂質土⑩である。

埋土からは瓦質の羽釜２点、瓦質の擂鉢１点、青磁片１点、土師質の皿が２点出土したが（図版４）、いずれも15世紀後半～16世紀前半代の年代を与えられるものである。

この溝の用途は定かではないが、遺物は付近に建物等が存在していたことを裏付けるものと思われる。

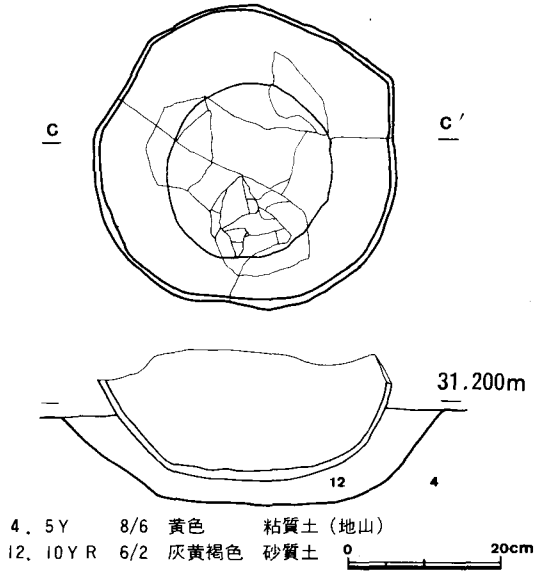
柱穴状遺構ＳＰ１　図版３-５



第７図　ＳＰ１　断面図

調査区の北西端、標高31.000ｍ付近の地山面上には、後述する16世紀後半～18世紀前半頃と考えられる土壙ＳＫ１によって切られた状況の下で、柱穴の一部と思われる遺構ＳＰ１が検出された。直径約15cm、深さは10cmと浅く、断面は逆台形である。遺構埋土は明灰色砂質土⑪一層で、前述の溝ＳＤＩ埋土と非常によく似ている。埋土から遺物は出土しなかった。形状から柱根部分と思われるが、上部は後世の削平をうけて殆ど失われたものと推測される。調査地点では地山以外に15世紀以前のものと思われる層は存在しない状況にあり、またこのＳＰ１の上から掘削された土壙ＳＫ１が16世紀以降のものと思われることから、それ以前の柱穴である可能性は高い。この東側1.5ｍにある溝ＳＤＩ内から出土した遺物（青磁、瓦質の羽釜）と建物等の関連を想起したい。

埋甕ＳＵ１（12）　図版３-１・６-２



第８図　ＳＵ１　平面図・断面図

調査区の中央部南端、井戸１と中世期の溝ＳＤ１の間に検出された埋甕は、16世紀後半～17世紀前半代の製品であると思われる。底部には特徴的な排泄物の付着がみられ、便所甕として使用された可能性が高いことがわかった。

便所甕の可能性に留めたのは、本来の遺構面は撹乱等によって失われ、ＳＵ１が検出された黄褐色粘質土⑤の地山面上には、他の遺構や撹乱の痕跡が混在し、中でもＳＵ１に接して井戸が存在しており、その位置関係等によって疑問が生じるためである。埋甕として他に水甕、蔵骨器等の可能性も考慮せねばならない。

残存高は約17cm、底部径20cmを測るが、復元すれば器高は約３倍の50cm、口径も45cm程度になると思われる。全体の約2/3を失っており、失われた胴部の大部分は発見できなかった。底部はやや丸底気味に膨らみをもち偏平ではない。全体は明褐色の土師質で、

外面は右下がりのタタキと内面には14本2.1cmを単位とするハケメがみられる。

調査結果によれば、埋甕は残存していた黄褐色粘質土⑤の地山に対して僅か８cm埋没されていただけの状態で検出され、胴部の約９cmが残存地山面上に検出された。土層観察では、地山とした黄褐色粘質土⑤は近代の撹乱土層①によって直接的な削平をうけており、この埋甕が大半を失っている事実とも符号する状況ではある。

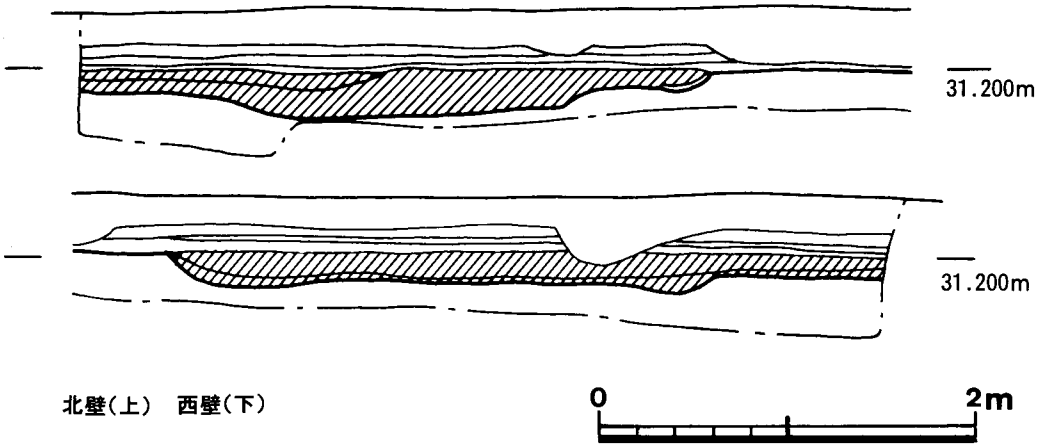
また地山の上には本来は中世以降のなんらかの土層も存在していた筈であり、それらの上から掘削が行われ甕を設置したとおもわれる。埋甕の周囲に僅かに残っていた掘り方内の裏込めの埋土は灰黄褐色の砂質土⑫であり、これが埋甕当時の地表面に最も近いものかとも思われ、当時の地表面は検出された地山面よりもかなり高かったと想像される。

調査地点周辺の現地表面は標高31.500m程度を測り、埋甕底部は約31.150mにあって、その差は約35cm程度である。推定復元した埋甕の器高がおよそ50cm程度であるから、現地表面の標高31.500m付近は埋甕の胴部2/3の付近に相当する。現在の地表面と17世紀頃のそれとは若干の高低差を考えなくてはならないが、参考までに述べれば、調査地点西方約50mには同じく江戸初期17世紀代の建築といわれる中家住宅の主屋があり、その礎石は現在の地表面上に並んでみられる。約400年以前と今とにおいても、地面の比高差が殆どない状況が想定される。この付近では中世以来屋敷地ということで、地表面にあたえられた高低差の変化が非常に小さかったのだろうかと想像される。埋甕ＳＵ１はその胴部の半分以上を17世紀当時の地表面から下に埋没していたという考察は或る程度妥当であると思われる。

至ってＳＵ１が便所甕であり、この場所に家屋が存在していたとは結論できないが、先に述べたとおり、撹乱等によって遺構面の大部分が失われ、本来は遺構の平面配置から考察されるべき遺構の性格等が、全くつかめない状況においては、あらゆる方法で検討を加える試みをするべきと思われる。

土壙ＳＫ１

調査区の北西端において、先述のＳＰ１を切る形で、検出された平面長方形の土壙である。その西端は調査区の西壁に遮られて不明であるが、検出された範囲では南北3.2m、東西2.2m程度の広さを測る。深さは約20cmであるが、掘り方の上部は後代の削平をうけており元々はさらに深かったと思われる。埋土は二層に分かれ、上に浅黄色の砂質土⑥、



第９図　ＳＫ１　断面図

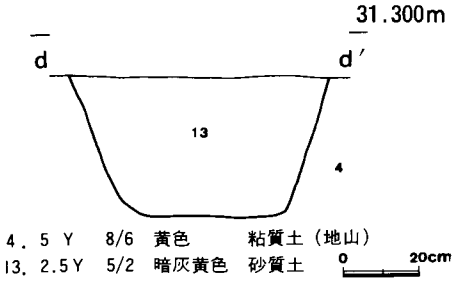
下は黒味を帯びた黄灰色の砂質土⑦であった。遺物は主に16世紀後半～18世紀前半の瓦片と陶磁器片（図版５）であるが、すべて下層⑦から検出された。

この土壙は、その形状からみて明らかに人為的なものと思われるが、先述したように、15世紀後半～16世紀前半代の遺物だけを出す溝ＳＤ１を切っていること、また16世紀後半～18世紀前半代に限定される遺物を包含することから、この土壙の掘削は16世紀後半以後に行われたと思われる。出土した遺物は先の埋甕ＳＵ１と比較した場合、年代が重複するものが存在しており、二つの遺構の関係には注目すべきである。先述した様に本来存在した筈の中近世の遺構面はそれぞれ後代の開発等で削平をうけたと思われ見ることができなかったが、調査区内で16世紀後半～17世紀前半頃のころに限ってみるならば、南に埋甕の便所を有するなんらかの建物が存在して、北側にはその建物に付随する施設としてこの方形の土壙が掘削されたとも考えられる。

また黒味のある埋土⑦はこの土壙内に水泥があったことを窺わせる。埋土内の遺物はどれも破片ばかりで雑然と不規則な検出状況であったことは、当初の目的は不明であるにせよ、或るいは庭の池等として掘削され、廃絶して廃棄物の捨て場となったのかもしれない。

土壙ＳＫ２　図版３-４

ＳＫ２は調査区の東南端部分に検出された平面円形の土壙である。直径はおよそ70cm、深さは約45cmである。中からは長さ約20cmの17世紀中頃の土師質の甕の口縁部分が一点出土したが（図版６-４）、他に出土遺物はなかった。これは先述の埋甕ＳＵ１の口縁で



第10図　ＳＫ２　断面図

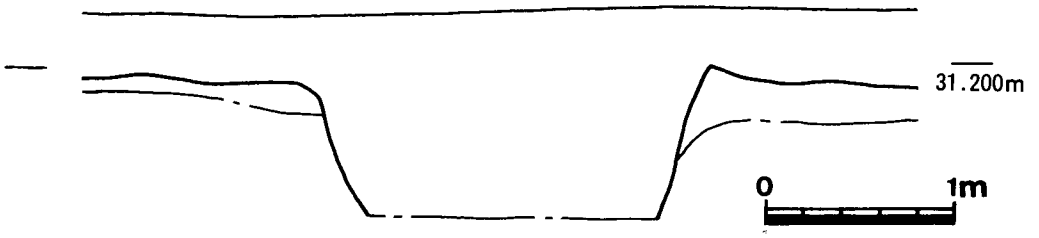
はなく、ＳＵ１よりひとまわり大きい甕のものである。埋土は暗灰黄色の砂質土⑬一層であるが、黒味を帯びた粘質土が含まれており、或いは撹乱かと思われる。

しかし形状円形の土壙とその規模、その中から土師質の甕の一部が出土したこと、さらに西側約2.75mにある埋甕ＳＵ１との位置関係をも考慮して、このＳＫ２にも埋甕があったことも考えられる。但し埋甕ＳＵ１の場合、その底部が標高31.100m、堀り方の最底部で31.060mであり、土壙ＳＫ２の最底部が標高30.800mを測る。比高差は約30cmあり、埋甕ＳＵ１の項で述べた、埋甕遺構における高さについての考察結果等を合わせて考えるべきであろう。

土壙ＳＫ３　図版３-６

調査区の中央部西端に、推定半径1.4mの円形の土壙の半分が西壁に切られる形で検出された。精査時の平面観察では、周囲に多く存在する撹乱等近代の落込みと思われたが、形状の特徴などから井戸である可能性を検討するべきかもしれない。西壁下に側溝を掘った際の断面観察では、その遺構埋土の中に多くの江戸期後半の瓦片と近代の遺物が混在する状況が窺われた。埋土の掘削は検出した地山面より－1.0m程行ったが、調査の都合と湧水のため、土壙の底部を確認することはできず、残念ながら成立年代を特定することはできなかった。

埋土は調査区全域にみられる近代の分厚い撹乱土層と非常によく似ている。また井戸枠の様なものの検出はなく、或るいは素掘りのものを考えるべきかもしれない。



第11図　ＳＫ３　断面図

第４節　遺物

遺物は15世紀後半～18世紀中頃のものが殆どであり、合計150点を数えた。主な内訳は、

埋甕ＳＵ１を含め埋甕３個体、15世紀～16世紀代の羽釜・青磁等５点はＳＤ１から出土している。他に16世紀後半～18世紀代の瓦片が約130点、陶磁器類が６点あり、これらはＳＫ１から出土した。これ以外は近代の井戸や掘削された撹乱土層から出土したもので18点を数えた。

ＳＤ１の遺物

狭長なＳＤ１では調査区の中央部付近からまとまって出土している。瓦質の羽釜の他、土師質の皿にしても表面部分に著しい摩耗がみられるのが、ＳＤ１出土遺物の特徴である。これらの遺物はいずれも破片であり、欠損する部分は検出できなかった。また検出状況には特別な並び方等はみられなかった。

例：遺物名（14頁の実測図番号）図版番号

・羽釜（１）図版４－１

同一地点で瓦質の羽釜の破片５点が検出された。いずれも同一の羽釜の口縁部の約80％を構成するものと思われる。復元口径は約20cm、残存高は6.5cmを測る。内外表面の調整は摩耗しているが、体部の外面にケズリ痕がみえる。鍔部下側には使用の際にできたと思われる二次焼成の赤変がみられる。いわゆる和泉型の羽釜の最も普及したタイプのものと思われ、15世紀代のものと推定される。

・すり鉢（２）図版４－５

羽釜とほぼ重なる状態で検出された瓦質のすり鉢の底部であり、底部の径は約９cm、残存高は5.5cmである。内外ともに摩耗しており、内面は24本6.0cmを単位とするハケメ、外面にケズリ痕が窺える。相対的に15世紀後半～16世紀前半と思われる。

・青磁碗（３）図版４－４

16世紀前半頃の青磁の碗の底部で、全体の約1/3の残存である。底部径は5.9cm、高台高1.2cm、残存高は3.5cmを測る。見込部に櫛描き文の蓮弁がみられ、外面は無文と思われる。

他に摩耗の著しい土師質の皿の破片が二点あるが、いずれも白土器（４）（５）図版４－２，３といわれる類のものと思われ、今後詳細な観察が必要である。いずれも復元口径は12cm程度である。

ＳＫ１の遺物

調査区の北西端で検出された土壙ＳＫ１は、疑問の多い方形の平面形をみせており、埋土は二層から成る。遺物は土器・瓦を問わず、下層の黒褐色砂質土⑦から乱雑な状態で検出された。遺物は天目茶碗等を含む16世紀末～18世紀中頃の陶磁器片が６点と瓦片が142点である。

・瓦

瓦片は軒丸瓦・軒平瓦を一切含まず、ほとんどが平瓦の破片である。平凡では、凹凸両面に大粒の離れ砂がみられる16世紀代のものが20点、他は17世紀初～17世紀中頃のもの82点、17世紀中～18世紀初頃のもの40点に分けられる。

・皿（６）図版５－４

底部径4.2cm、器高3.5cm、復元口径11.0cm。胎土目跡は二カ所みえ、高台は露胎の三ヶ月高台である。特徴から16世紀後半～17世紀初期の唐津皿と思われる。

・天目茶碗（７）図版５－３

高台径4.2cm、残存高3.0cmを測る。全体に黒釉がかかり、特徴から16世紀末～17世紀初頃の唐津天目茶碗と思われる。

・碗（８）図版５－５

底部径4.2cm、残存高は4.9cm。特徴から17世紀代の唐津の椀と思われる。器壁は厚く白釉に覆われるが、見込み部分で釉切れがあり、やや粗雑な感がある。

・碗（９）図版５－２

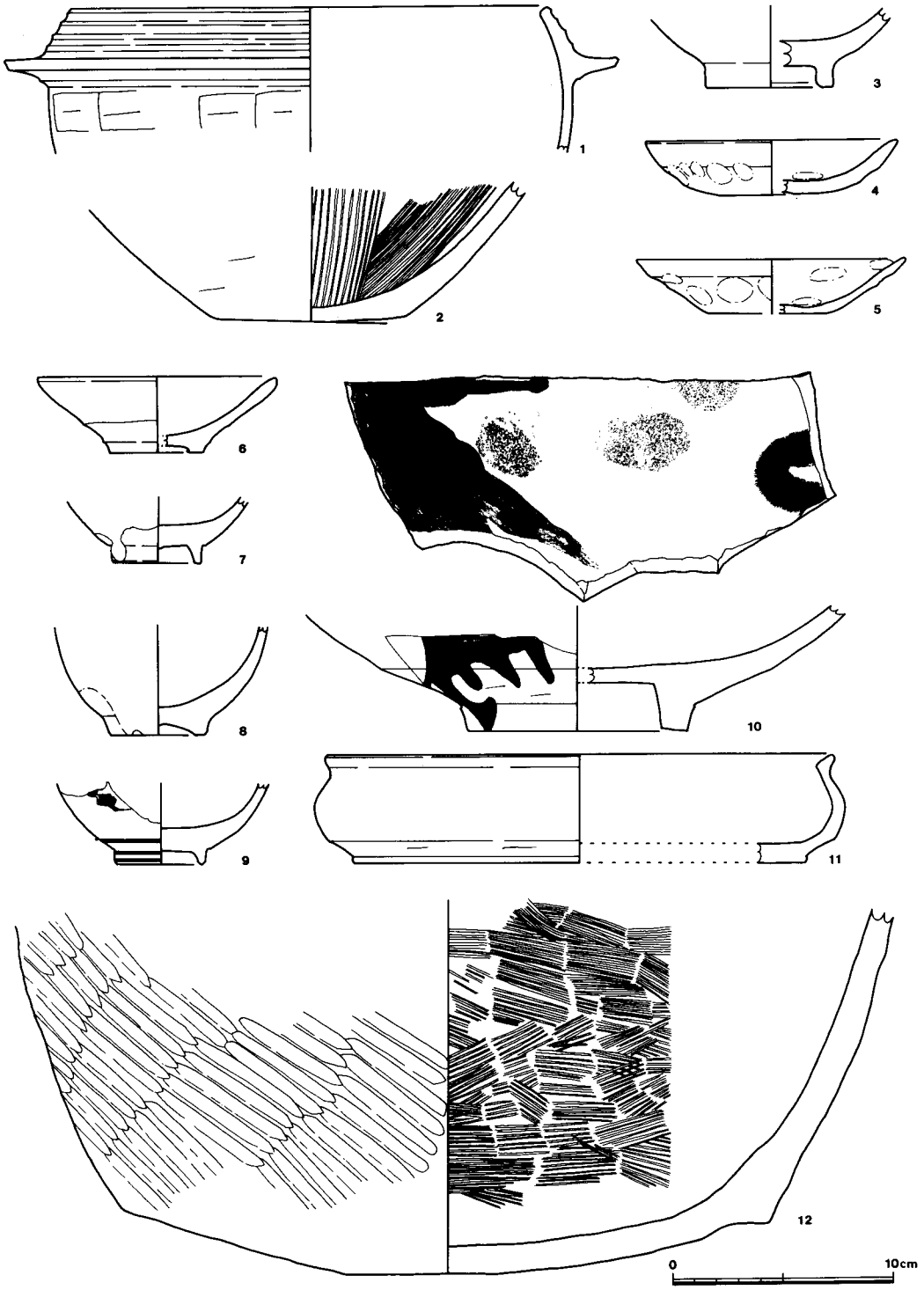
高台径4.2cm、残存高は3.7cm。手描きの梅樹文がみられ、その特徴は18世紀前～中頃の肥前磁器・波佐見系と思われる。

・鉢（10）図版５－１

唐津二彩の鉢の底部であり、高台径10.0cm、残存高は5.7cmで、今回出土したもののなかでは最も美しく見栄えのするものである。見込み部分には、大粒の砂目跡がよく残っており、特徴から寛永期以降の17世紀後～18世紀初頃のものと推定される。

・平鉢（11）図版６－１

16世紀末～17世紀初頃の丹波の平鉢と思われる。全体の1/7程度の残存であるが、底部と口縁部が残存しており、器高5.0cm、口径23.4cm程度を復元できる。類例が比較的少なく、茶器の可能性がある。



第12図　出土遺物

第３章　おわりに

今回の発掘で最も古い年代が考えられたのは調査区を南北に縦断するような溝ＳＤ１である。瓦質の羽釜や青磁など15世紀～16世紀前半の期間に限定される土器が僅か５点しか検出されなかったため、遺構そのものの年代を決めるのは躊躇されるが、他に15世紀代よりも古い遺構・遺物は一切検出されなかった。また溝ＳＤ１の掘り方等その上部は後世に失われており、本来の姿は或る程度深く、大きなものだったかもしれない。ＳＤ１内から出土した羽釜等と、掘立柱建物の柱根状の遺構ＳＰ１の検出からも、15世紀～16世紀代の建物等の存在は考えられる。

調査区北西端に検出された土壙ＳＫ１は、そこから検出された遺物と層位との関係から16世紀後半～18世紀前半の間に存在した遺構と考えられ、後に埋没する直前には瓦や土器等廃棄物の一種の捨て場になっていたと思われる。ここから検出された平瓦に明らかに16世紀代を示すものも多く含まれており、この付近が先の溝ＳＤ１以後も絶えることなく、屋敷地等として管理されていたと推測される。

またＳＫ１出土の瓦の観察から、16世紀代のもの、17世紀前半代のもの、17世紀後半代のもの、と三つの時期に区分でき、或いは半世紀単位の瓦の葺替えがあったのかもしれない。

瓦とは年代において一致するＳＫ１出土の陶磁器片の中でも、丹波の平鉢や唐津の二彩の鉢等は茶器と思われ、いわゆる庶民レベルを超えた範疇に属する陶磁器が検出されたことは、この場所に富裕な階層にあった者の屋敷があったことを裏付けるものであろう。またこれら陶磁器に瀬戸・美濃系のものがみられなかったことも付け加えておく。

また調査区南端の埋甕ＳＵ１やさらに土壙ＳＫ３で検出された17世紀中頃の大型の甕の口縁は、便所用の埋甕と思われ、この場所が江戸期に入った17世紀代にはなんらかの屋敷地の一角であった可能性が高いことを示している。

調査区全域に存在する近代の整地（撹乱）層には18世紀代を示す陶磁器や瓦の破片も僅かに含まれる。それらは整地の際に粉砕され、復元できない程の細片になっている。

相対的に18世紀後半以降の遺物が少ないことこそ、この地点の特徴なのかもしれない。調査区北西側のＳＫ１付近における土層の観察では、ＳＫ１がなんらかの理由で埋め立てられたと思われる18世紀前半以後、近代に入ってから耕作土②と床土③が築かれるまでの間に相当する土層としては茶褐色砂質土層④がみられるだけである。もっともこの

状況は、この場所が近代になるまで耕作地にはならず、屋敷地の一角にあったことを示しているのかもしれない。耕作はおそらく昭和になってから行われたと思われるが、この時に遺構が撹乱をうけたと考えられる。

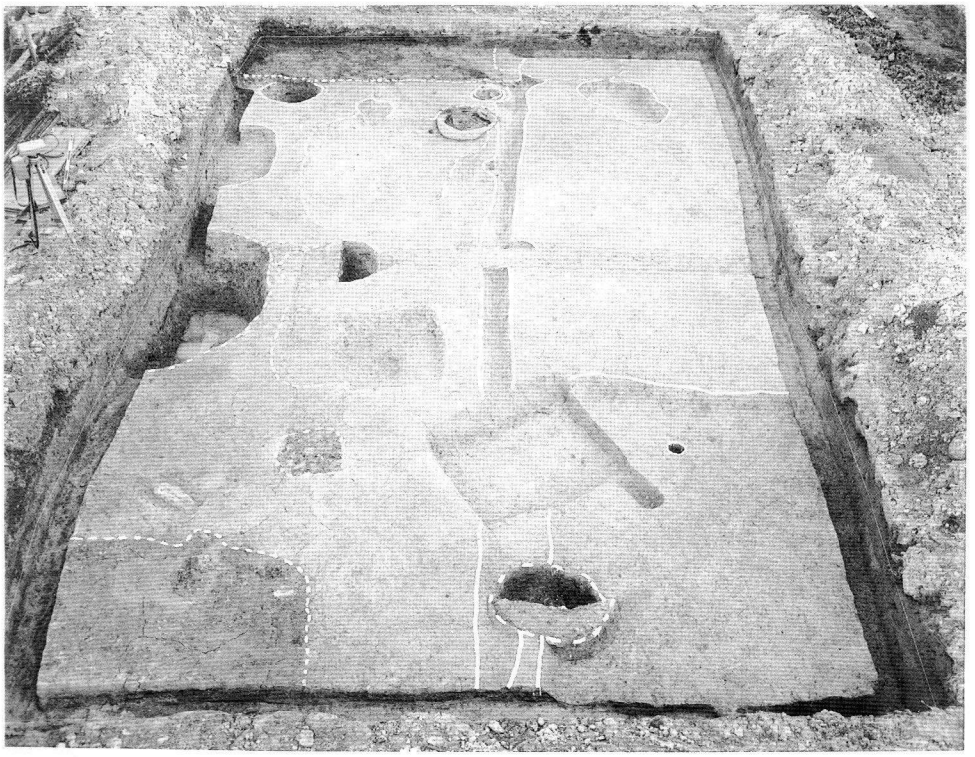
特に重要であると思われる15世紀以降から江戸時代にかけての主要な遺構面が失われている状況では、たとえ埋甕や溝等の比較的深く掘削された遺構の痕跡が残っていても、もはや当時の建物等の平面配置を正確に推定することはできない。収集したデーターの整理を中心とした内業作業等で、でき得る限りの方法で対処しなければならない。今回は遺物に関する相対的な判断と、土層断面図を中心とした層位的な観察との総合等を試みた。

以上が調査が行われた中家住宅93－１区の概要である。中家と直接結び付くような確証を得ることはできなかったが、今回のようにその周囲を調査することによって徐々にその外郭を明らかにする手掛かりを得たいと思う。中家の周辺一帯は一様に家屋が建て込んでおり、今回の調査区でみられたように、既に遺構面は或る程度破壊されていると思われる。今後開発が増えれば、僅かに残った部分も完全に破壊されるだろう。従って中家周辺における発掘調査は慎重かつ緊急に行われなくてはならない時であると思う。

図　　版

図版第1　調査区全景

調査区全景（遺構掘削前）



調査区全景

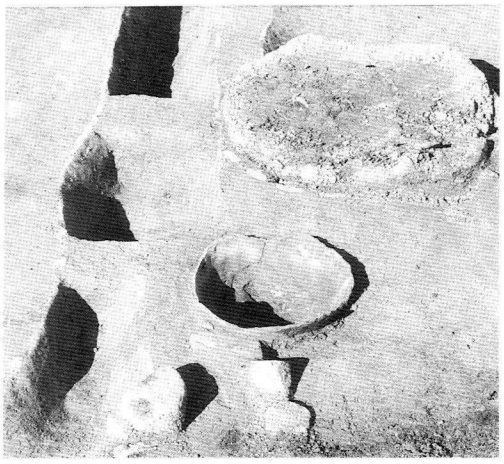
図版第2　土層

調査区　北壁

調査区　西壁

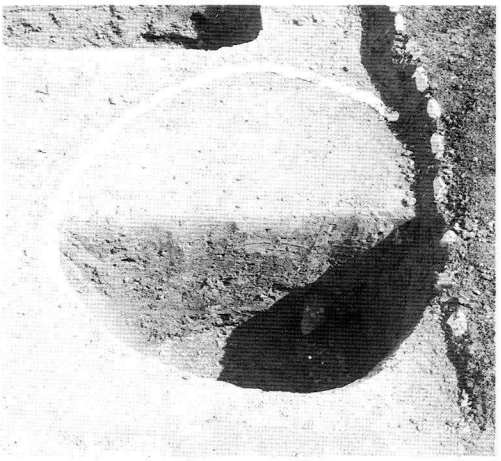
図版第3　遺構

1　SU1　東から



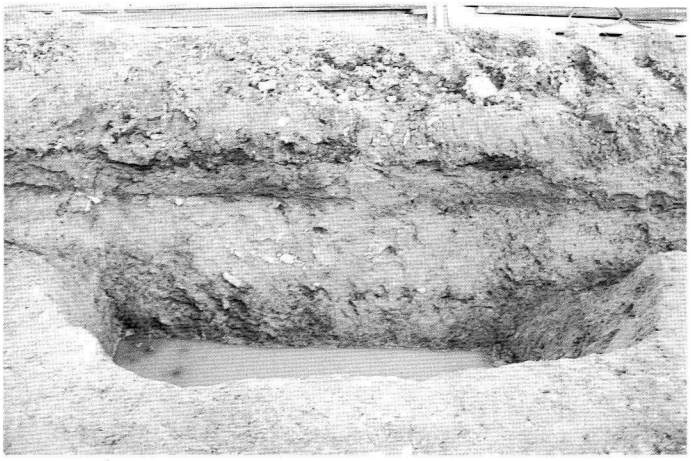
2　SU1　南から

3　SD1　北から



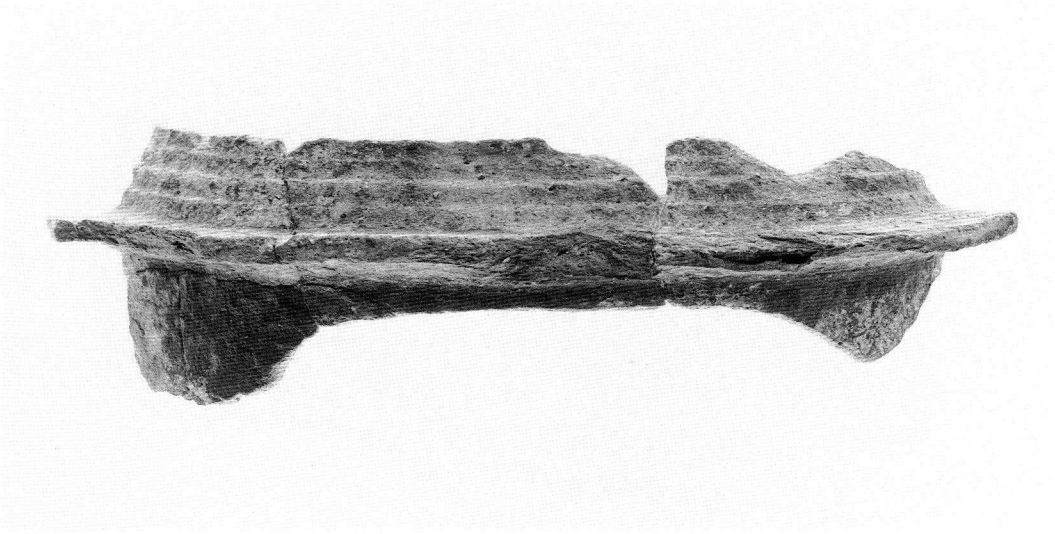
4　SK2　南から

5　SP1　西から



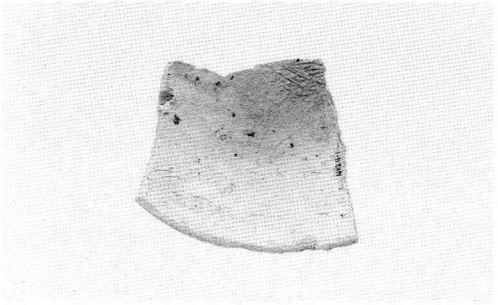
6　SK3　西から

図版第4　出土遺物



1

2



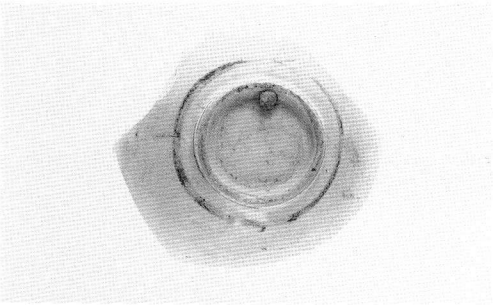
3

4

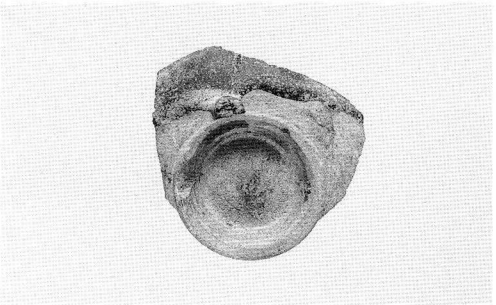
5

図版第5　出土遺物

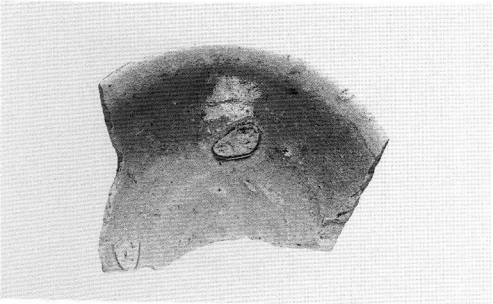
1



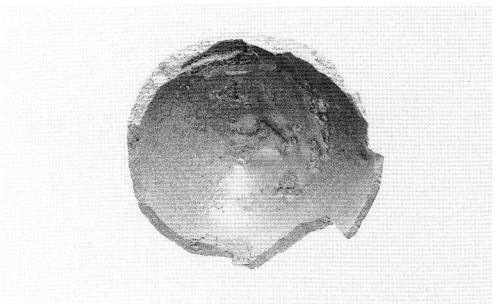
2



3

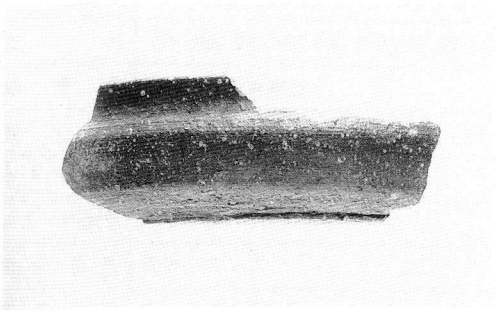


4



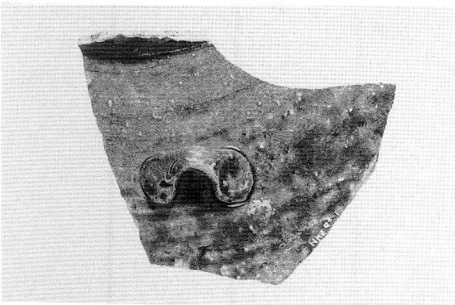
5

図版第6　出土遺物

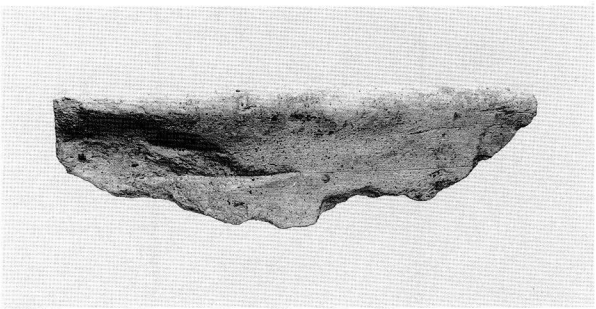


1

2



3



4

報告書抄録

ふりがな	なかけじゅうたくはっくつちょうさがいよう
書名	中家住宅発掘調査概要
副書名	93－1区の調査
巻次	I
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	前川 淳
編集機関	熊取町教育委員会
所在地	〒590－04 大阪府泉南郡熊取町大字野田2244 ℡0724－52－1001
発行年月日	西暦 1994年 3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかけじゅうたく 中家住宅	おおさかふせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざごもん 熊取町大字五門	27361		34°23′49″	135°21′7″	93－1区 19930906～ 19931002	84.0	集合住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中家住宅	屋敷跡	中世	溝	瓦質土器、青磁、土師器	重要文化財中家住宅との関連は不明
		近世	土壙 埋甕	瓦、磁器 土師質甕	

熊取町埋蔵文化財調査報告 第21集

中家住宅発掘調査概要 I

平成６年３月・発行

発行・編集　熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地

印刷　小 笠 原 印 刷